『トクシマ・アンツァイガー』

第 23 号　　徳島　1915 年 9 月 5 日

ドイツ国民に

私がドイツ国民に武器をとるよう呼びかけねばならなくなってから、一年が過ぎた。未曾有の血腥い時がヨーロッパと世界にやってきた。神と歴史を前にして、私の良心は潔白である。私は戦争を望まなかったのだ。列強の同盟にとってドイツは大きくなりすぎていたが、彼らは 10 年にわたる準備期間ののち、今こそ好機の瞬間が来たと思った。正義にかかわることで同盟国オーストリア・ハンガリーに誠実に味方する帝国をおとしめるか、優勢な戦いの中で押しつぶそうとしたのだ。

すでに一年前に告げたように、征服欲がわれわれを戦争に駆り立てたのではない。8 月の日々、武器をとれるすべての者は旗のもとに急ぎ、諸部隊は防衛戦へと出征していった。そのとき、地上のあらゆるドイツ人は、満場一致の帝国議会の先例にならって、国民のかけがえのない財産と彼ら

の生命・自由のために戦わなければならないと感じた。外国の力がわれわれの民族とヨーロッパの運命を決定することに成功したら、何がわれわれを待ち受けているかということは、わが愛する東プロイセン地方の苦難によって示された。戦いは無理強いされたのだという意識によって、奇蹟はなされた。つまり、政治的な意見の対立は影をひそめ、争い合っていたすべての人々は相互に理解と敬意を持ちはじめ、全国民は誠実な連帯の精神に満たされたのである。

われわれは今、感謝の念をもって「神はわれらとともにあった」と言ってよいだろう。不遜にも数週間でベルリンに入城しようとしていた敵軍は、東でも西でも手ひどい打撃を受けて遠くまで撃退された。ヨーロッパのさまざまな所でなされた多くの戦闘や、近海やはるか遠くの岸辺でおこなわれた海戦によって、正当防衛を強いられたドイツの怒りとドイツの戦術が何をなしうるかが証明された。敵たちによる国際法の歪曲も、われわれの戦争遂行の経済的基盤を揺るがすことはできなかった。国家・自治体・農業・商工業・経済・技術は、戦争の苦難を和らげようと競い合っている。銃後の国民は、自由な商品流通への必要な介入に対して理解を十分に持ち、戦場にいる同胞の世話に身をささげ、力をふりしぼって共通の危険を防ごうとしている。

今も、またこれからもずっと、祖国は深い感謝の念をもって戦士たちのことを思うだろう。決死の覚悟で敵に激しく抵抗している人々、負傷や病気によって退いた人々、とりわけ戦いに斃れ、異国の地や海の底で安らっている人々のことを。愛する者が祖国のために死んだ、その悲しみを、私は、父たちや母たち、寡婦たちや孤児たちとともに感じている。

帝国の建国者たちの精神にあった内面の強さと国を思う一途な意志が、勝利を保証するのだ。わが国が 1870 年に戦い取ったものを今一度守らなければならなくなるという見通しのもとに、この建国者たちが築いていた堤防は、世界史上最大の洪水をものともしなかった。個々の人々の有能さと国家の生命力の前例のない証拠を見て、私は次のような喜ばしい確信を

抱いている。すなわち、戦争の中で体験した浄化をいつまでも保っているドイツ民族は、古（いにしえ）からの確かな道を、また信頼感をもって歩んできた道を、陶冶と礼節においてさらに力強く前進するであろう。

偉大な体験によって、ひとは畏怖の念を抱き、心を確固たるものにする。英雄的に行為し、耐えることによって、われわれは、平和が来るまで揺らぐことなく持ちこたえよう。

それは、将来のために必要な、軍事的、政治的、経済的な安全をわれわれにもたらし、祖国と自由な海において、われわれの創造的諸力の十分な展開のための諸条件を実現してくれるような平和である。

かくてわれわれは、何年かかろうとも、ドイツの権利と自由のための大いなる戦いを、栄誉をもって耐え抜き、神の前で勝利に値する国民となるだろう。神がわれらの武器をなおも祝福したまわんことを。

総司令部にて　1915 年 7 月 31 日

王にして皇帝たるヴィルヘルム

スポーツ週間

8 月 29 日の日曜日、サッカーの予選が第一チームと第二チームのあいだでおこなわれた。

第一チームは、ザウアーが支持していたライトウィングのカンプチクが不参加のため、本来よりやや弱い戦力での出場を届け出ていた。前半の早い時間帯に、第一チームは 1 点取った。けれども試合再開ののち、第二チームはまとまりを見せ、前半の残り時間のあいだプレイはほとんど第一チームのゴール前でおこなわれていた。第二チームは狙いすましたような側面攻撃で二つのゴールを奪い、その結果前半が終わったとき、試合は第二チームが 2 対 1 でリードしていた。

後半、試合は一進一退となり、あるときは第一チームのゴールが、ま

たあるときは第二チームのゴールが脅かされた。第一チームがとうとうシュートをひとつ決め、これで同点になった。後半の半ば、第二チームはフォワードがひとり抜けたことによって戦力が低下し、その後まもなく第一チームはやつぎばやに２点の追加に成功した。第一チームのゴールキーパーがボールを持って走ったことにより、ペナルティキックを招き、第二チームは試合終了間際に３点目のゴールでお返しした。ホイッスルが鳴ったとき、第一チームは４対３で第二チームに勝っていた。

本当に激戦だったし、実に見事な個人プレイに讃嘆することもかなりあったが、チームプレイはというと、時折文句をつけたくなることもあった。

８月30日の日曜日、運動場にまた人が集まり、第一チームと第三チームのサッカー決勝戦を観戦した。事前の取り決めにより、第一、第二チームに対して、第三チームは１ゴールが２点と計算されるというハンディキャップが定められていた。

かなり時間がたってから、第一チームは１点入れることに成功した。しかし第三チームは意気阻喪せず、試合再開後精力的に攻めたて、第一チームのゴールにうまく迫っていった。第一チームの好守備によってボールは中央に戻ったが、第三チームによって再び前方に運ばれ、敵のゴールにけり込まれた。その後すぐに、第一チームは再びシュートに成功し、その結果前半終了の時には同点になっていた。

後半開始後、試合の様相は変わり、プレイの大部分は第三チームのゴール前でおこなわれた。どうやら第三チームは、前半で力をかなり使い果たしてしまったようだ。だが、それにもかかわらずなおもたびたび敵のゴールを脅かすことができた。けれども、第一チームは後半４点を追加し、その結果試合は第一チームが５対２[1]で勝ち、こうして賞を獲得した。

いずれにせよ、われわれは第三チームが競技会に参加してくれたことを喜んで歓迎した。第三チームがこれ以上の結果を出せなかった理由は、ま

1　原文どおり。これまでの経過を読むかぎりでは、６対２のように思われる。

ず第一に、新しく組織されたばかりのチームであり、メンバーがいっしょにプレイする機会が事前にほとんどなかったということであろう。もう少し練習すれば、このチームはきっと次のスポーツ週間にはわれわれを驚かせてくれるだろう。

同じ日、すでに 100 メートル走がおこなわれていたが、われわれは、仲間の中に本当にすばらしい走者たちがいることがわかって喜ばないではいられなかった。最高タイムは二等砲兵クロイツの 12 秒 2 で、二位は一等砲兵カウマンスの 12 秒 3 であり、一等兵曹レンケルと二等砲兵スモルカは 12 秒 4 で走った。

この催しのクライマックスは水曜日の 9 月 1 日で、一日中スポーツに捧げられた。朝の 7 時半にはもう競技が始まっていた。

世界記録は打ち立てられなかったにしても、われわれはかなりのすばらしい成果を本当に誇りとすることができよう。また、10 月終わりに予定されている次のスポーツ大会には、もっとよいものが見られると期待してよいだろう。それまでに、練習の時間と機会が非常に多いからである。

プログラムの順番にしたがって、各競技の上位 3 位までの成績を以下に示す。

	記録	得点
朝		
走り高跳び		
二等砲兵パウアー	１．５０ｍ	１３
同　モンゼース	１．４７５ｍ	１３
一等砲兵カウマンス	１．４０ｍ	１１
同　グレーベ	１．４０ｍ	１１
棒高跳び		
二等兵曹クランツ	２．５５ｍ	１５
二等砲兵ローデ	２．４０ｍ	１２
一等兵曹レンケル	２．３５ｍ	１１

石投げ（１７ｋｇ）

二等兵曹クランツ	６．４０ｍ	１６
二等砲兵キーアドルフ	６．１０ｍ	１４
一等砲兵ヘルンライン	５．８８ｍ	１２

幅高跳び

二等砲兵シルト	１．４５ｍ	１３
一等砲兵カウマンス	１．４２５ｍ	１３
一等海兵グラウル	１．４０ｍ	１２

棒幅跳び

二等兵曹クランツ	７．１８ｍ	１８
一等砲兵バウアーファイント	７ｍ	１７
一等兵曹レンケル	６．２５ｍ	１２

午後４時

走り幅跳び

一等砲兵カウマンス	５．７２ｍ	１７
一等砲兵バウアーファイント	５．６４ｍ	１６
二等砲兵パウアー	５．６１ｍ	１６

砲丸投げ

二等兵曹クランツ	９．２８ｍ	２１
二等砲兵キーアドルフ	８．８９ｍ	１９
一等兵曹レンケル	８．５０ｍ	１８

ドイツ式三段跳び

一等海兵グラウル	１１．６０ｍ	１７
一等砲兵バウアーファイント	１１．１０ｍ	１４
二等砲兵モンゼース	１０．４５ｍ	１０

１００メートル走

二等砲兵クロイツ	１２秒４	１８

一等砲兵カウマンス	１２秒６	１７
一等兵曹レンケル	１２秒８	１６
二等砲兵スモルカ	１２秒８	１６

九種競技

二等兵曹クランツ	１１２
一等兵曹レンケル	１１１
一等砲兵バウアーファイント	９５
同　カウマンス	９４

休憩中には、われわれの疲れを知らぬオーケストラの心地よい調べが鳴り響いた。そしてたいへん喜ばしいことに、われわれの音楽家たちの中にも何人もの受賞者がいた。

5 時 30 分、デュムラー大尉殿の短いスピーチのあと、受賞者たちが歩み出た。それぞれの種目について、三つの賞品が設けられていた。そのうち一位と二位の賞は、日本の思い出となるささやかな品であり、三位の賞は、二箱の煙草だった。このほか、一位と二位の賞として、二等砲兵シュミートの立案で、われわれの印刷所で作られた表彰状が授与された。これは、受賞者にとってすばらしい記念品となるにちがいない。

おしまいに、真のスポーツ精神を評価されたサッカーの第三チームと、われわれをずっと無私の精神で支えてくれている楽団に煙草が授与された。これは、デュムラー大尉殿が授賞式のためにありがたくも寄付してくれたものだ。

最後にもう一度この催しを振り返ってみて言えることは、それはあらゆる点で成功だったし、われわれは皆、多大の関心をもって次回のスポーツ週間を待ち望んでいる、ということである。

日本の歴史（21）

旅順要塞は、ロシア人によってまだ改造が完了していなかった。防備工事の大部分は、包囲されたのちにようやくなされ、完成したのである。ロシアの守備隊は約 41,700 名で、砲兵隊には砲 646 門と機関銃 62 丁があった。そのほか港にはまだ装甲艦 6 隻、巡洋艦 5 隻、砲艦 4 隻と水雷艇 21 隻が停泊していた。

日本の攻囲軍は、包囲の終わり頃には歩兵連隊 22、野砲連隊 6、騎兵連隊 3、工兵大隊 8、鉄道大隊 1、飛行船部隊 1、攻城砲 403 門を数えた。

攻囲軍は［・・・・[2]］主力軍を補強することになっていた。それゆえ、日本軍はこの攻囲軍を自由に使えるようにするため、旅順攻撃を非常に強引に急がせた。7 月 30 日に要塞の包囲が完了し、日本軍はロシア軍を周辺部から本来の要塞線まで押し込んだ。一回目の総攻撃は 8 月 19 日から 22 日にかけておこなわれ、それに先立って要塞全体に通例の砲撃が加えられた。日本軍は、この町を最初の突撃ですぐに占領できると思っていた。しかし、ロシア軍の必死の抵抗にあって、日本軍が成功したのは、北方と西方の前線を押しやった以外は、東方前線の主要防衛線にある二つの中間堡塁を占領したことだけだった。彼らは、これらの堡塁を落とした後に力尽きてしまい、突撃を続けることができなかった。突撃が続行されていたら、日本軍はおそらく意図した成果に恵まれたことだろう。さらに突撃が 9 月、10 月、11 月と繰り返されたが、依然としてロシア軍は持ちこたえていた。攻撃側は、要塞の包囲網を徐々に狭めていったが、どの陣地もロシア兵によって賞賛すべき粘り強さで徹底的に守られた。何カ月ものあいだ、両軍は場所によっては数歩しか離れていないところで対峙し、ひとつひとつの陣地を奪うために、手榴弾・水雷・爆弾・地雷を使って、かつてなかったような戦いを繰り広げた。12 月のはじめ、高い山（二百三高地）

2　一行分判読不能。おそらく早めに旅順を落として満州にいる主力軍に加わるというような内容。

収容所の情景　　その６

が最終的に日本軍の手に帰し、その後すぐに守備の要であったコントラレンコ将軍が死ぬと、ロシア軍の抗戦は弱まった。1905 年 1 月 1 日、ステッセル将軍は日本軍に交渉者を派遣し、守備隊全員が武器を手にして自由に退去できるよう求めた。けれども、日本軍はこれに同意せず、将校には軍刀のみ所持を許し、誓言をすればロシアに帰ることを許したが、それ以外の守備隊は捕虜となった。降伏のとき、守備隊はまだ 34,600 名いたが、そのうち約 11,500 名だけが戦線にいて、それ以外は病気か戦傷か養生が必要な人々であった。攻囲の過程で砲 238 門と機関銃 54 丁が使用不能になっていた。それらの一部は艦砲によって補われた。それゆえ、開城のときには依然として砲 610 門と機関銃 9 丁が陣地にあった。

港内にあった艦隊は、海上で活動することはあまりなかった。ウラジオストックへの突破をしきりに迫られたが、艦隊はいっさい出撃しなかった。艦隊司令官のヴィレン少将は、そうやってこちらに向かっている大西洋艦隊の到着を待つ方が正しいと思ったのだ。とりわけ彼の艦艇は、砲や弾薬、兵員を陸に揚げていたので、どの道すでに戦闘力を低下させていたということもあった。もっとも、これによって陸上の防御力は著しく強化されてはいたが。高地を占領されたことで艦隊の運命は決まった。日本軍はそこから港を見渡して、港湾の不利な状況のために停泊を余儀なくされていた艦艇を次々に砲火で狙い撃ち、着底させることができたからである。

つづく

日本の盆祭り

8 月 23 日から 26 日までのあいだ、われわれはまた日本の祭の賑やかで騒がしい営みを観察できた。それはお盆だった。昔は、死せる先祖たちの栄誉を讃える記念祭だった。この祭りは、かつてはもっぱら武士やその家来たちによって、一種のパレードで祝われるものであった。

のちに大名の蜂須賀蓬庵[3]が、すべての町人にもこれらの日々にお祝いをし、楽や踊りを楽しんでよいという許可を与えた。そのきっかけは、彼が非常に重い病気から回復したことであった。

すべての町人のこうした全面的参加によって、また時を経るうちに、盆の祭りはもともとの意味と形を失ってしまった。この祭りの日々には、朝7時から夜12時まで踊って楽を奏することが許されている。

この祭りの最中に観察できたことだが、特に若い娘たちや子供たちは、色とりどりの素敵な衣装を着て、たいていは奇妙な被り物やお面をつけて、三味線の音に合わせて歌い、踊りながら、朝から晩まで通りを移動していった。徳島では特に阿呆踊りがおこなわれる。けれども、これらの踊りは今日、いかなる点においてももはや本来の盆祭りとはかかわりがない。

第17回コンサート　1915年9月5日

プログラム

1. 『勝利の旗のもとに』　行進曲　フォン・ブロン
2. 『ヘ音のメロディー』　ルービンシュタイン
3. 『おばあちゃん』　レントラー[4]

ランガー

4. 『ベルリンは揺れる』　大ヒット曲のメドレー

序奏、1）『映画の魔法』より「菩提樹の下で」マーチ、2）『ライラックの歌』、3）『いとしいアウグスティン』より「うれしくてたまらない」

3　蜂須賀家政（1558-1638）。秀吉の四国征伐で武功を立て、1586年阿波の大名となる。城が完成したときに、好きに踊ってよいという触れを城下に出したことが阿波踊りの発祥との説がある。晩年、蓬庵と号した。

4　三拍子の南ドイツの民族舞曲でワルツの前身とされる

4)『一番好きな男の子』より「キティ」 黒人のセレナーデ、5)『恋人は自動人形』より「お嬢さん、左回りに踊ってください」、6)『グリグリ』より「小さな酒場女」、7)『青春はすばらしい』 ライン地方の歌 8)『モダンな時代』より「恋人よ、踊ろう」、9)『遠大な計画』より「幼な妻」、10)『映画の魔法』より「どこかでお会いしませんでしたか」、11)『マリーのポルカ』、12)『シュヴィンデルマイアー株式会社』より「シュヴィンデルマイアー嬢」、13)『いとしいアウグスティン』より「それどこに書いてあるの」、14)『いっしょに夢の国へ行こう』 アメリカの歌、15)『猿の愛』、16)『遠大な計画』より「パウリーナが踊りに行く」、17)『よろめきダンス』、18)『運転手さん、首都へ行って』より「娘たちはそこへ行く」

5.『きっとそうだ、あの空に鳩が飛んでいる』 コロー

笑劇『号外』よりデュエット

リフレイン： きっとそうだ、ぼくは信じる。
あの空に鳩が飛んでいる。
あれがここに何も落とさないなら
ドイツの巣からやってきたのだ。

図書室

前号の『トクシマ・アンツァイガー』に載せられたものに加えて、その後なおも次のような雑誌が図書室に入れられた。

『園亭』	1904 年	33 冊
『プロメテウス』	1901/02 年	37 冊
『ユーゲント』	1911 年	38 冊

1912 年		37 冊
（戦争特集号）	1914 年	5 冊
（戦争特集号）	1915 年	7 冊
『絵入り新聞』	1914 年	12 冊
『近代芸術』		3 冊
『戦争新聞』	1914 年	11 冊

チェス・コーナー

（駒の略語　K = キング、D = クイーン、L = ビショップ、
S = ナイト、T = ルーク、B = ポーン）

第 39 問解答

1. Dd7 - d6　任意の手
2. D, T, S いずれでも詰み

第 40 問解答

1.Se4 - e3　Ke5 - f6
2. Se2 - d5+　Kf6 - f7(e5)
3. Lc2 - g6　(Lh6 - g7) 詰み

1. . . . . .　Ke5 - d4
2. Se7 - d5　Kd4 - e5(c5)
3. Lh6 - g7(e3) 詰み

正解はヨーゼフ・ヴェーバー

第 41 問

白：Ka8, Dg3, Tc4, g6, Sd7, f5, Ba2.

黒：Kd5, Tc5 Le5, g2, Sb2, f1, Ba7, c6, f6.

２手詰め

第 42 問

白：Kg6, Dg1, Ld8, h1, Sf7, Bb5, d6, g4.

黒：Kf4, Db8, Bg5, h6.

３手詰め

勲章授与

皇帝陛下は水雷艇Ｓ９０[5]の乗組員たちに第二級鉄十字章を、また艇長のブルンナー大尉に第一級鉄十字章を授与した。

「エムデン」上陸隊体験記（９）

数時間後、彼らはわれわれの船に乗り移っていた。われわれ自身はけっして彼らの船室には入らず、占拠もしなかった。しばしば高級船員たちがみずから手伝ってくれた。彼らは書類からわかったことを信号で伝えてくれて、積み荷を移すようにと叫んだ。それから艦長が、船を連れてゆくか沈めるか決めた。われわれは、積み荷の中から使えるもの、とりわけ食糧をいつも取り込んだ。多くのイギリス人の高級船員と水夫は、こちらの船に移ってくる時間を使って、ウイスキーを海に捨てるのはもったいないと浴びるほど飲んだ。ある船長は、自分の船との別れを悲しんで涙を流したそうだが、彼が泥酔しているのを私はこの目で見た。しかし、これよりもずっとたちが悪いのは、おそらく自分の競争相手と見なしてのことだろうが、幾人かが仲間に対しておこなったあからさまな裏切りだった。「『キロ』に出会わなかったですか。このままの進路で２時間行けば、きっと出会うでしょう。」ある船長は問われもしないのにこう言ったのだ。他の船長たちの同様のほのめかしのおかげで、われわれはいくつかの獲物を得た。ミュッケは生き生きと付け加えた。「その名前を言ってもいいよ。」そして名前を挙げた。

つづく

5　1914 年 10 月 17 日、封鎖された青島港をひそかに脱出して軍艦「高千穂」を撃沈し、山東省の海岸に乗り上げ、乗組員は一時南京で拘束された。第１巻第６号「戦闘日誌」に関連記事あり。

シュピーゲル（鏡）

「トクシマ・アンツァイガー」23号ユーモア付録
1915年9月5日

砲丸投げ
選手

スポーツ
週間より

競　技

今週は目新しいものがたくさんあった。
それはスポーツと試合での競い合いだ。
そのために熱心な練習がなされていた。
立派な成績が出るようにと。
そして毎日陽気な群衆がやってきた。
学校の前にある運動場に。
幾多の熱戦がそこで繰り広げられた。
徒競争、球技や他のスポーツで。

彼らがなしたことは無駄ではなかった。
歌人たちは栄誉をひたすら讃えた。
賞賛のみならず多くの賞品も、
戦う彼らが熱望する目標だった。
そして誰もがあの日々をなつかしむ。
競技で時が楽しく過ぎたあの日々を。

表　彰　式

これは昔からの教訓だ。

努力には苦労がつきものだ。

あの哀れな男を見ればわかる。

救護班が彼を運んでくる。

何といっても本当のことだが

スポーツは楽しいしずっとそうだった。

でも、やはり用心しよう。

そして習わし通りにスポーツをやろう。